2023年5月28日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

聖霊があなたに来た！

［ローマの信徒への手紙8：18～30節］

現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います。被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。

まだ終わった訳ではありませんが、コロナウィルスの3年間を歩んできました。この中で私たちが感じてきたことは「うめき」だったのではないでしょうか？ 「必ず解決出来る、ゴールが必ずある」ということが示されていれば、苦しみの中にも明るさがあると思うのですが、私たちの世代ではほとんど経験したことがないことでしたので、それは「うめき」と言うしかない思いを私たちは抱いて歩んできた（いえ、今もそうだとも言えますが）と思います。

そして、今私たちは「ローマの信徒への手紙」を読んでいますが、先週は生身の人間パウロの「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう」（7:24）という告白の言葉を聴きました。これも「うめき」ですよね。聖書は人間のうめきを隠しません。パウロはご存知のように大伝道者でした。しかもこの「ローマの信徒への手紙」は、パウロの晩年の頃の手紙と言われています。激しい迫害も受けながら世界伝道を三度も行った、恐いものナシと思えるパウロです。その彼は晩年になって、自分の中の「うめき」を告白しています。しかし、私はパウロがこのように告白したのは、単なる絶望の吐露ではななく、その後に続く「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」（7:25）とあるように、彼は主を仰ぎながら告白している所が大事ではないかと思うとお話ししました。本当にそう思うのです。

私たちの礼拝もそうではないでしょうか？私たちは礼拝で神様の前に出るのです。それは恐ろしいことです。神様は私たちのことを全てご存じなのですから。では何故私たちはこのように礼拝を捧げることが出来ているのでしょうか。変な言い方ですが、ただ神様に叩かれるために行っているのですか？そんなことはありません。私たちは自分の惨めさ、自分の不信仰や罪を聖書の光に照らされて浮き彫りにされます。自分自身では気づけなかった、することが出来なかった本当の自分を内側を示されます、そしてパウロと共に言うのですね。「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」。―十字架のイエス・キリストは、私たちのうめきを知り、私たちに替わって神様に執成し祈って下さった唯一のお方です。この方を通して私たちは神に感謝を捧げることが出来る、これが礼拝だと思います。どん底に来て下さったお方がいらっしゃるから、私たちもどん底からの叫びを上げることが出来るのです。

今日の午後、「川越市民クリスマス」の一環で、この川越市の幾つもの教会が一緒に礼拝をし、交わる「クリスチャンフェスティバル」を行うのですが、私はメッセージをお願いされていて、何をお話しようかなと考えていました。そして今日は「聖霊降臨日」でもありますが、私は今のようなことをお話しできたら、と思っています。神様は、このコロナの間のうめきも知っていて下さっている。私たち自身が抱いた不安も痛みも、またそれぞれの教会の課題や問題もその「うめき」を共にうめいていて下さっているお方だとお話したいです。そしてこのうめきは、8:18以下にあるようなことに神様は繋げて下さっているということです。―「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います。被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。」

パウロが言っていることはスケールが大きいですね。「被造物」。造られた物（者）全てです。この世界全体、環境、動植物すべてがうめいていると。その大きな原因は人間でしょう。戦争、内戦、環境破壊、地球の温暖化も、またこの度のコロナウィルスの発生も、環境問題の歪みと関係しているのではと言われていました。被造物は、人間の故に傷つき、うめいている。でもそのうめきは所謂ため息とは違うのです。ため息は自分の中で留まってしまうけれど、うめきは、造り主である神様に向かっているので「産みの苦しみ」なのだと言っています。21-22節。「つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。」―つまりこのうめきは神様に届いている、と言っているのです。神様の新しい世界が開けて行くための今は「過渡期」なのだと。

そしてさらに驚くべきことをパウロは言います。被造物である人間のうめきを語り、そのうめきを共にうめく「聖霊」について語っています。26節。「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。」　皆さん、病気になった時、どうでしょうか？「祈りにならない」ということがあるのではないでしょうか？痛くて、苦しくて、気持ちも整理がつかなくて、ただうめくしかないということ。そして、「生きる」ということは「うめくこと」と言っても過言ではないのではないでしょうか？―そこに「霊」が、「聖霊」があなたの傍らにやってきた、と言うのです。「わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」。何と神様は近くに来て下さっているのでしょうか！この私よりも、私に近く、あなたよりもあなたの深みにおられ、そこで祈って下さっていると言うのです。これは大きな慰めです。

私は週報にもお書きしたのですが、旧約のイスラエルの歴史も、また新約のイエス様の12弟子も皆、神様の目から見ると目を覆いたくなるような姿を露呈してしまっていますよね。でも神様は旧約の時代でこの世界を終わらせなかったし、遂に神の独り子イエス様を送って下さいました。しかし主の弟子たちは自分の生活を捨ててイエス様のおそばにいながら、土壇場でイエス様を見捨ててしまった訳です。でも、でもですよ、神様の方が、イエス様の方が、弟子たちに見切りをつけることはなかったのです。福音書にあるように、復活された主が、部屋に鍵をかけ閉じ籠っていた弟子たちを訪れて「おはよう！」と言ったんです。「あなた方に平安あれ」と言ったんです。その時イエス様は「息を吹きかけて」と記されています。ここに既に聖霊の息吹きがあります。それは、神様からの大きな赦しと派遣です。挫折し、もう自分はダメだと思う私たち、神様の前にもう出られないと思う私たち、そういう者を主は愛し、また、遣わして下さるのです。私はそのことがローマ8:28の意味なのではないかなと思いました。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」―「万事」とは、私たちの罪も弱さも含めた「万事」です。神様は偉大な建築家で、こんな粗末な素材・かけらは要らないというような物も見事にお用いになって、私たちの人生を完成させて下さるのです。神様は、私たちが自慢出来るような事柄でなく、隠しておきたいうめきのような部分でこそ深く繋がって下さるのだと思います。このパウロのように。

私は「聖霊降臨」ということを考えていた時に、ヨハネ福音書14:16以下の言葉が響いてきました。―「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。 」

どういうことかと言うと、イエス様は過去の物語の人ではなく、今、リアルなあなたと共にいるということです！聖霊は時を超えて、あなたと神様を切っても切れない関係とする。あなたは実はイエスと共に十字架につけられ、共に死に、そして共に甦って、もう天の祝福の中を生きている、と。神様はどんな私たちであっても、私たちを見捨て、みなしごにされることはないのです！「聖霊」が与えられたということはそういうことだと思います。「聖霊降臨」後、つまり今、主イエス様は、いつもリアルな方として、私たちと一つになっていて下さっているのです。

うなだれることが多い現実です。自分の健康のこと、家族の試練のこと、経済のこと、社会のこと、手に負えない事ばかりで、私たちは手詰まり感に支配されそうになります。けれども、パウロは言っています。「私たちは神の子なのだ。この体も含めた私自身も、やがて本当に贖われる時が来る。その希望を今生きようと」。そうです。私たちは既に、私たちの人生を完成させて下さる主に、神様の霊によって結ばれているのですから！お祈り致します。